

Almost forgotten, tea set was a witness to history

It was used during talks that opened up Japan.

By YUICHI SHINYANI

The Asahi Shimbun

A century and a half ago, a tea set played a small role in the delicate negotiations that ultimately opened Japan to the world.

Yet, for generations the set had been forgotten until recently, when it was discovered in a museum in the U.S. state of Massachusetts.

The set had been used to entertain Townsend Harris (1804-1878), the first U.S. consul general to Japan.

Harris arrived in Shimoda, Shizuoka Prefecture, in 1856 to negotiate a treaty with the Edo shogunate.

The host and original owner of the teapot and cups for Japanese green tea was Shimoda magistrate Inoue Kiyonao (1809-1868), Harris's counterpart in the negotiations.

Haggling dragged on for months as Harris repeatedly sought an audience with the shogun.

Negotiations were finally resolved in the Treaty of

Amity and Commerce, signed in July 1858, which opened Japan to foreign trade

and culture and ended more than two centuries of self-imposed seclusion.

According to Harris' diary of his six-year stay in Japan, he was invited to a traditional Japanese meal at the private home of the Shimoda magistrate on Feb. 24, 1857. The meal was followed by tea ceremony.

Harris was told that the invitation was a sure sign of warm hospitality. He went on to comment that the tea set was the most exquisite set he had ever seen.

Henry Conrad Joannes Heusken, who served as Harris' interpreter, wrote in his diary that the host presented Harris with all the tea things and the box that it came in as a gift.

After that, the tea set disappeared from all records.



Portrait of Townsend Harris (1804-1878)

It was Ikka Tsukuda, 57, a tea ceremony master from Tokyo, who began looking for the tea set after learning that it may have found its way to the Peabody Essex Museum in Salem, Massachusetts.

Tsukuda traced the set to the museum several years ago. It turned out that Harris had given the set to a close friend, a U.S. Navy commodore. After his death, the commodore's family donated it to the museum, which has a distinguished history and Asian art collection.

The set is nestled inside a box made of paulownia wood, measuring 25 centimeters by 15 cm, and is 30 cm high.

There is an inscription in English on the box that says it was a gift to Commodore James Armstrong.

Another inscription is signed. It reads: Townsend Harris at Shimoda, Japan.

The tea set consists of a tea pot and tea cups with a sometsuke cobalt blue underglaze, and other fixings.

Naosuke Takamura, director of the Yokohama Archives of History museum in Yokohama, com-



The "sometsuke" cobalt blue tea set used to entertain Townsend Harris during negotiations that opened Japan to the world

mented: "Harris handed over the (set) to someone he could trust, knowing it would be treated with the

utmost care. "I am sure Harris fully understood how Inoue and the others felt about the set."

幕末の日米交渉の証人



米博物館に渡る

幕末に日米修好通商条約を結ぶために来日した米國初代駐日領事タウンゼント・ハリス(1804-78)を江戸幕府が接待した茶器使用された品々、専門家は「驚しいその際に贈られたとみられる

ハリスに贈った茶道具を発見



タウンゼント・ハリスの肖像(玉泉寺蔵、週刊朝日百科「日本の歴史」から)

幕末に日米修好通商条約を結ぶために来日した米國初代駐日領事タウンゼント・ハリス(1804-78)を江戸幕府が接待した茶器使用された品々、専門家は「驚しいその際に贈られたとみられる

ハリスは1856年8月から下田(現・静岡県下田市)で幕府と交渉。幕府と会見するしないの交渉が長く、茶道具の贈り物(25品)は英行15品、高き30品)には英船で「ジェームズ・アームストロング」号へ「タウンゼント・ハリス 日本の下田で」などある。道具は幕府の急須、茶碗など、急須には「永楽」の文字、茶碗には「永楽」の印があり、この2種は京焼の名工、水楽長全(1795-1854)の作らしい。

高村直助・横浜開港資料館長は「ハリスは粗末に扱わず、信頼できる人に渡した。井上らの思いをくんだのなら」と話す。(新谷祐一)

タウンゼント・ハリスの茶道具

1957年2月24日、下田において西洋人に対して初めての茶会が催された。「客」はアメリカ領事タウンゼント・ハリス、「亭主」は下田奉行井上信濃守清直、勘定奉行川路聖謨の実弟である。場所は第二奉行岡田備後守の役邸。この茶会で使用され、そっくりそのままハリスに進呈された煎茶道具一式がおよそ150年ぶりにアメリカ・ボストン郊外で発見することができた。



セーラム市

EastIndiaMarineHall

急須・茶碗は幕末三窯の一、永楽（保全）の染付け、急須には永楽の文字が記され、茶碗系尻脇には「永」の描印がある。白木の桐箱（棚）に納められ、当時使用された焙烙（茶を焙じる器具）も和紙が貼られた状態で保存されている。そして驚かされるのは茶心壺（茶器）の中に、井上信濃守が献じた茶の残りがそのまま保存されている。150年を経て茶の香りは中国茶のようなタンニンが発酵した匂いをかすかに奏で、縊りは弱く棒状を呈している。



ペリーおよびハリスから始まる日米外交史の中でこの下田茶会はどのような意味を持つのか。それはタウンゼント・ハリス自身の手記および書記官のヒュースケンの日記から次のようなことが読みとれる。

1857年2月21日、ハリスはこう語る。

下田奉行の一人である備後守が、江戸から戻ったとあって、訪ねてくる。(中略)奉行は私(ハリス)に、自分と信濃守とを私邸に訪ねてくれるようにいった。私(ハリス)はそれを承知し

た。すると、彼は私(ハリス)に、西洋料理にするか、それとも日本料理がよいかと問うた。私は後者をえらんだ。

安政4年2月1日(西洋歴2月24日)この日、下田奉行の二人、井上信濃守清直と岡田備後守忠養はとても緊張したに違いない。なぜならこの日は、外国要人が高級官僚の役邸を訪問し、外交交渉の一環として正式に外国の要人に対して食事を接待した初めての日なのである。

ハリスは下田の岡田備後守邸に招かれる。懐石の手順に沿って「食事」がすすみ、あらかた終わったところで井上信濃守は美しい愛用の茶道具を自分のところへ運ばせた。

それは清らかな白木の箱に納められ、中には、湯沸し用の小さい窯（涼炉）、急須、二つの茶碗、茶壺、それに急須と茶碗の敷物、茶合、茶を湯の中に入れる前に茶を焙る道具が入っていた。そして、通訳の森山多吉郎はこう説明した。「身分のある人物が同様に身分の高い客を迎えて深い敬意を示そうと思うときは、手ずからお茶をいれてもてなすのが日本の習慣です。今、第一奉行の信濃守は親愛なるハリス総領事閣下に敬意を表するために、いまそのおもてなしを致します。」と。そして井上はお茶の葉を扱う手順を、その道の通人のプライドを示しながら、次々に説明し、茶を量り、焙じたお茶の葉を急須の中に入れ、湯を沸かし、その熱湯をお茶の葉の上にそそぎ、そうして淹れたお茶を手ずからハリスに渡した。ハリスがそのお茶を飲み干すと一座の日本人から、大きな感歎の声がおこった。信濃守は点前をしながらハリスにこういっている。「この一連の出来事を、大きな敬愛の証拠としてハリスに認めてほしい」と。そしてハリスはこれに同意をし、さらに茶をいれるのに使われた道具は、すべて引出物としてハリス領事に贈られた。以上が日本が外国に向けて発したティーセレモニーの第一号である。委細はハリスの日本滞在記によってアメリカ政府に報告されている。

今日我々は「Tea Ceremony」は「茶を点ずるための儀式」と思いがちである。しかしこの言葉が造語された時には、茶の Ceremony は茶を淹れるための儀式ではなくて「Tea Ceremony」自体が人をもてなすための儀式というように理解できる。

幕末の日米交渉の中で特異な存在であるこの茶道具は永く行方が知れなかった。ハリスが持ち帰った遺品の中にはどこにも見あたらず、おそらく航海中に失われたモノであろうと想像されていた。

しかし、最近になって、ボストン郊外セーラム市のピーボディーエセックス博物館に当時のアメリカ海軍アジア提督アームストロング提督がアジア諸国から持ち帰り、その遺族から同館に寄贈した遺品の中に入っているのが見つかることができた。

さらにはこれら煎茶道具を飾るための棚（棚の存在は以前から確認されていたがこれが何のためのモノかは不明であった。）が存在し、この棚の上部にはハリスの自筆で「アメリカ海軍ジェームズ・アームストロング提督へ。船上の会食の友より感謝をこめて。下田にて タウンゼント・ハリス」と記されている。



この歴史的なハリスと信濃守とで行われた茶会はいろいろなことを思わせる。まず第一はここで行われたのが抹茶茶会ではなく、煎茶会であったということである。この当時主流は煎茶へ移行したと岡倉天心も述べているが、今日「ティーセレモニー」といえば、抹茶点前が想定されるのに対し、初めての「ティーセレモニー」が煎茶点前だったというのは面白い。この当時はもう玉露は発明されていたろうと思われるのだが焙炉をつかっているところから見て、茶は玉露ではなくて煎茶点前、普通のお茶のいれかたで供されている。

第2に煎茶が幕府の高級官僚の接待の手法としてまで広がっていたことである。この下田茶会によって直ちに煎茶広範囲の普及を断じることにはできないが、幕府旗本・御家人は自邸に茶を栽培することが多く、煎茶は京阪の文人の狭い世界で普及してきたと見るのではなく、より広範囲な文化として定着してきたと見るのが適当ではなからうかと思わせる。

第2に煎茶が幕府の高級官僚の接待の手法としてまで広がっていたことである。この下田茶会によって直ちに煎茶広範囲の普及を断じることにはできないが、幕府旗本・御家人は自邸に茶を栽培することが多く、煎茶は京阪の文人の狭い世界で普及してきたと見るのではなく、より広範囲な文化として定着してきたと見るのが適当ではなからうかと思わせる。